

「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

京都大学文学部4年 秋山原

今回の台湾派遣で私は国立政治大学、国立陽明大学および国立清華大学において開催された哲学に関するワークショップと清華大学の日本語授業に参加した。哲学ワークショップには主に分析アジア哲学に関するもの(政治大学)、心の哲学や言語哲学に関するもの(陽明大学)、学生の交流を目的としたもの(清華大学)があった。政治大学と陽明大学でのワークショップでは私自身の発表の機会はなかったが、この1、2年の間出口先生の講義で学んだことや卒業論文執筆のため自分自身で身につけた知識が各発表の理解につながったことを実感した。私自身が哲学に関して発表の機会をもったのは清華大学でのワークショップで、そこで卒業論文のテーマ(ラッセルの中立的一元論)についての短い発表を英語で行った。私にとって公式の場において英語で発表を行うというのは初めての体験だった。ディスカッションも含めて15分ほどの発表だったためテーマについて新たな発見をするにはいたらなかったが、自分の意図が確かに伝わったことに自信を持つことができた。また、清華大学の日本語授業でも日本文化紹介というかたちで自分の発表をする機会があった。そこでは私が剣道をやっていることをふまえて武士道についての発表を行った。この発表は武士道を日本における従来型の理想的男性像として捉え、その「男らしさ」をめぐる生じる葛藤について語るものだった。その際、キーワードとして『葉隠』と三島由紀夫に注目し、また自分自身の経験もふまえながら、最後に近年の草食系男子のブームを取り上げた。発表の後にはディスカッションがあり、台湾の女性は男性の「男らしさ」を重視するという意見がある一方で、「男らしさ」からはかけ離れた日本のジャニーズ系アイドルの人気も高いという意見も出された。このような一見して矛盾した現象についてより深く掘り下げていくことで台湾や日本の文化に対する理解につながるのではないかという期待を抱いた。ただ、このような発表の場での交流以上に台湾の学生たちとの食事会や課外活動においてより大きな収穫があったように思う。共に現地の映画を見たり、夜市をめぐることで単純に友人としての関係を築くことができた。だからこそ、彼らが日本語で話してくれるならばこちらも中国語で話せるようになりたいという意欲が湧いてくるし、彼らが日本に来るときよりよく日本を紹介したいから日本の文化についてもっと勉強しようという意識も生まれてくる。今後もこの友人関係を保ち、あるいは新たに築き、語学能力をさらに磨きつつ、日台両方の文化に対する理解を深めていきたい。